2021 年度目標達成状況報告書（コンピュータサイエンス学部）

＊自己評価は「S・A・B・C」の 4 段階で「S：十分満たしている、A：満たしている、B：概ね満たしている、C：満たしていない」

<table>
<tr><th>No.</th><th>評価基準</th><th colspan="2"></th></tr>
<tr><td rowspan="5">1</td><td>年度目標</td><td colspan="2">専攻制カリキュラムの完成と見直し
▸ プログラミング・コア科目等開講済み科目の評価・改善
▸ 各専攻を特色付ける演習系科目の設計・実行</td></tr>
<tr><td rowspan="4">年度末報告</td><td colspan="2">学部の自己点検 WG による点検・評価</td></tr>
<tr><td>自己評価</td><td>A</td></tr>
<tr><td>理由</td><td>　プログラミング・コア科目等開講済み科目の評価・改善に関しては、多くの授業において「先端的なプログラム開発環境の提供」を行い、さらに必要に応じて「産業界との連携」や「多角的視点に基づくプログラミング教育」などを導入している。これらの改善の具体的な効果を現時点で定量的に評価することは難しいが、導入に苦労が予想された取り組みについてもうまく始動できたことは大変好ましいことである。
　一方、 各専攻を特色付ける演習系科目の設計に関しては、専攻別アゴラなどを通じて教員間で深い議論を行い、大局的な視点から演習系科目の設計を行った。この設計の善悪については来年度以降これらの科目を開講してからでないと判断ができないが、教員間の議論の結果、専攻全体として「もれなくダブりなく」各科目の内容が設計できた点は高く評価できる。</td></tr>
<tr><td>改善策</td><td>　一般論として、プログラミングの授業は画一的な内容になりやすく、また、「できる」学生と「できない」学生の実力差が大きくなりやすい性質を持つ。これらの問題を打破するためには、様々な新しい授業方法を試しつつ最善の方法を模索してゆくしかない。コンピュータサイエンス学部ではこの視点から「多角的視点に基づくプログラミング教育」の実践に力を入れているが、この取り組みは、今回にとどまらず、さらに多様な方向から進めてゆくべきであろう。</td></tr>
<tr><th>No.</th><th>評価基準</th><th colspan="2"></th></tr>
<tr><td rowspan="5">2</td><td>年度目標</td><td colspan="2">学生の自主的活動の支援
▸ 優秀学生・意欲のある学生への活動の場を提供
▸ コンピュータサイエンス学部ラボ制度の推進</td></tr>
<tr><td rowspan="4">年度末報告</td><td colspan="2">学部の自己点検 WG による点検・評価</td></tr>
<tr><td>自己評価</td><td>A</td></tr>
<tr><td>理由</td><td>　優秀学生・意欲のある学生への活動の場の提供については、「正課授業の活動」と「課外での活動(各種イベントの開催・参加など)」の両面から様々な取り組みを進めた。これらの取り組みの具体的な教育効果を短期間で結論付けることは難しいが、取り組みの</td></tr>
</table>

			中には、学会発表、講演会の開催、ハッカソンの開催や参加、他大学や外国大学との交流など多様な内容が含まれており、これらは優秀学生・意欲ある学生にとっては魅力的なものであると推定される。 　また、コンピュータサイエンス学部ラボ制度については、2022年4月の開始に向け現在5つのラボの立ち上げ準備を進めているところである。これに関しても、うまく学生のやる気を引き出すことができれば、大きな学修効果を期待できる。
		改善策	学生の自主的活動の支援は、今後ラボ制度を中心に進めてゆくことを予定している。このラボ制度をどの程度活発化させることができるのかによって学生の自主的活動の幅は大きく変わってくることから、2022年3月計画しているラボ制度について2022年4月の開始後にも柔軟な改善策を加えつつ活発化を図ってゆきたい。
No.	評価基準		
3	年度目標	新しい学士修士一貫教育の検討 ▸ 学士修士6年一貫教育の制度化検討 ▸ 制度変更なく実質的な修士までの一貫教育への取り組み	
	年度末報告	学部の自己点検WGによる点検・評価	
		自己評価	C
		理由	コロナ禍に伴う対応に注力したせいもあり、 検討に組織的に着手する余裕がなかった。
		改善策	優秀で意欲的な学生の学修成果を上げ、十分に実力をつけさせること、学生自身の満足度を向上させることを、引き続き取り組んでいきたい。現在実施している早期卒業制度、学士修士一貫教育制度の利点・欠点を洗い出すとともに、期間を短縮しない学士修士一貫教育のために必要な仕組みを構築したい。2024年度開始の新カリキュラムにおいては、高度実践教育プログラムの導入とあわせて相乗的な効果を期待できる制度設計に取り組んでいきたい。

【年度目標達成状況総括】

　年度目標「1」、「2」に関しては、学部教員全員で問題意識を共有できており、学部としての取り組みに加え、教員個人毎の工夫も相まって年度初めの想定よりも高い水準で達成できたと考えられる。今後は学部の全カリキュラムに対して個々の取り組みを組織化していくことが望まれる。

　一方、年度目標「3」については、社会情勢（コロナ禍）などの影響もあって、学部での議論を十分に活性化させることができなかった。この点については来年度の継続課題としたい。

【2021年度目標の達成状況に関する大学評価】（自己点検評価委員会）

年度目標3件に対し概ね達成されている。学士修士一貫教育の制度化については学生の立場や制度内容等について検討してほしい。